

# しらずのうち

脚本 大島寛史

登場人物

男1

男2 (第三大白歯)

女1 (第二大白歯など)

男1 出会いはいつも突然で。予兆はいつも確実に過去にあって。別れもいつも突然で。予兆はそれでも確実に過去にあって。無くなってしまえばなんてことは無いのだけれど、無くなる時には、痛みと苦しみを伴う。ぽっかりと開いた穴に挟まるのは、たくさんの、思い出、悲しみ、開放感、そして、食べかす。これは、出会いと別れの物語。いつの間にか住んでいた、あいつと私の物語。いつの間にか済んでればとつても気楽なお話で、空でも飛べる気になるけれどそうはいかない、いかせてくれない。だけれども。覚悟と意思とお金があれば、しらすのうち――

男2 嘘をーつくなくー！

男1 ついてない。

男2 嘘をーかさねるなー！

男1 重ねてない。

男2 ああ、罪深い、罪深いぞ、お前はー！

男1 深くない。

男2 お前は知っていただろう。

男1 全然、しらすのうちに、じゃないだろう。お前は全部知ってるはずだ。ちよつと欠けた瞬間も、穴が開いていく経過も、生まれた時も、知っているはずだ！！

男1 覚えてない、もう！

男2 それはただの開き直りだ！

男1 ……だから、それが何だつて言うんだよ！

男2、しりもちをつく。

男1 え？

男2 信じられない。

男1 は？

男2 嘘をつくのは悪いことだろう？お母さんから教わらなかったか？

男1 教わらなかった

男2 じゃあお前のママは欠陥品だ

男1 そんな風に言うな！

男2 欠陥品から生まれたお前も欠陥品だ

男1 よせ！ママの悪口はよせ！

男2 だって教わってないんだろ？

男1 教わったよ。教わった。守らないだけさ、僕が！

男2 じゃあ、お前だけが欠陥品だ。

男1 うん、なら、いい。うん。

男2 お前、変わったやつだな。

男1 ただのマザコンだよ。

男2 ほら、変わってる。

音楽が鳴る。男1、2、去る。

入れ替わりで女1、登場。

女1 記憶は段々と曖昧になっていく物です。

時間が経てば経つほど薄れていきます。

なので、おそらく二人の、きつと出会いは大分前。

9年くらい前のお話。

とある日の。春か夏か秋か冬か。朝か昼か夜か。

かすかな痛みとむずがゆさ。

太陽が出ていた様な見えなかった様な。

そんなある日のことでした。

女1、去る。すれ違い、男1、駆け込んでくる。

ゆっくりとその後を男2が入ってくる。

男1 なんなんだよ、急に。

男2 時が、来ただけさ。

男1 痛いんだけど。

男2 悪いな。不可抗力だ。

男1 なんなんだよ、お前。

男2 俺か？俺はな、お前の、第三大白歯だ。

男1 は？

男2 そうだ。

男1 え？

男2 ……俺は、お前の、第三大白歯だ！

男1 は？

男2 そうだ。

男1 え？なにに対して「そうだ」って言ってんの？



男2 いいか、よく聞け。  
男1 聞けつつつても、(女1にむかって)だ、だれ……？  
男2 俺は、横に生えている。  
男1 は？  
男2 そうだ。あと、本当はこうなってる。(足をクロスさせる)  
男1 は？  
男2 そうだって。  
男1 もういい。  
男2 俺は、横に生えているんだ。だから、ここ、とこの間。  
          ここが、必ず虫歯になる。虫歯菌に犯される。  
          だから、だからああ！！  
男1 うわ。  
男2 今のうちに。今のうちに……抜け！  
男1 え？  
男2 俺を、お前から抜け。わかる、わかる、怖いよな。  
          ものすごく痛いかもしれない、顔面が腫れ上がるかもしれない。  
          瀬術に失敗してこの辺に痺れが残るかもしれない。  
          下顎第三大臼歯だから、神経に近いから。  
          全身麻酔をする大手術かもしれない！手術の経験は？  
男1 ない  
男2 だよな。しつてた。おめでとう、初手術かもしれないぞ。  
          ものすごく痛いかもしれないけど！  
男1 ネガキャンにしかきこえないんだよなあ  
男2 ……抜かないのか？  
男1 まだ、虫歯じゃないんだろ？  
男2 必ず虫歯になるんだって！  
男1 未来の話だろ？  
男2 ああ。  
男1 虫歯になる前に、交通事故で死ぬかもしれないし。  
          そしたら損だろ？  
男2 なんてやつだ……。  
男1 リスクは出来るだけ、避けたいんだよ。  
男2 臆病者！  
男1 なんとでもいえ。  
男2 マザコン！  
男1 事実ですから。

男2 やーい、お前の親知らずー、むーしばー！

男1 ゴロ最悪、お前って言うな。

男2 チキン野郎！

男1 誰がチキンだ！

男2 マーティマクフライかよ。

男1 とにかく、俺は抜かないから。お前を。

男2 一緒にいたい気持ちはわかるけどさ

男1 それは微塵もないけどさ

男2 まじかよ

男1 本当は抜きたいよ。なんで生えてきたんだよって

恨んでもいる。でも、ギリギリまで見ない振り、

していたんだよ。本当に、もうダメだってなる、

ギリギリまで、さ。

男2 ものすごく格好わるいぞ。……いいか、

俺は苦しまなくて済むようにに言ってるんだ。

俺は、あんたの親知らずは必ず虫歯になる。

虫歯になって必ず苦しめる。だから、その前に、抜け。

男1 親知らずを……？

男2 ああ。

男1 親知らずを抜く……。

男2 そうだ。

男1 俺が……親知らずを、抜く……。

女1、現れて歌い始める。

男1 出会いはいつも突然で。予兆はいつも確実に過去にあって。

別れもいつも突然で。予兆はそれでも確実に過去にあって。

無くなってしまうばなんてことは無いのだけれど、

無くなる時には、痛みと苦しみを伴う。

ぽっかりと開いた穴に挟まるのは、

たくさんの、思い出、悲しみ、

開放感、そして、食べかす。——ちよっと、うるさい。

けれど歌は止まない。

男1 (諦めて、更に大声で) いやだ。いやだ。いやだ。

親知らずを、抜く? そんなのイヤだー! 抜かない!

磨けばいいんでしょ。歯を。磨けばいいんだろ!

お手入れして、虫歯にならなければいいんだろ!

そしたら、別に、問題ないでしょ?

だってほら、舌で触ってもさ、こんな、こんな感じだし。

大丈夫だよ。きつと。大丈夫。

女1 男の大丈夫ほどさあてにならないものってないよね。

男2 どうした急に

女1、去って行く。男2、追いかける

男1 大丈夫。大丈夫。大丈夫。

俺はそう自分に言い聞かせるように呟いた。

確かに、女性に対する男の大丈夫は、きつと微塵も大丈夫じゃないけれど、でも、俺の歯に対する大丈夫は、きつと絶対に大丈夫だ。

男2、白衣を着て現れる。

男2 あのー、ねえ、この歯絶対に虫歯になりますよ。予言します。

だから今、抜いちゃいます? どうします?

男1 別件で歯医者に行った時、親知らずによく似た

歯医者がこう言った。

そんな、簡単に抜く抜かないの選択を迫らないで欲しい。

デリカシーが無い。私は当然首を横に振った。

あ、大丈夫です。

男2 後悔しますよ。

男2、去る。

入れ替わりで女1、現れる。

女1 どうだった歯医者。親知らず抜いた?

男1 今日は別件で行ったの。

女1 なによ別件で。同じ件でしょ。

ささっと抜いちゃえばいいのに。

男1 そんな簡単にいかないの。ねえねには関係ないでしょ。  
女1 はっ

男1 なんだよ

女1 お母さん聞いてよお母さん

男1 あーあー！ママには！ママには！

女1 あんたのたを思っていつてやってるんだよ？私は

男1 わかってる、わかってるよ、うるさいな！

女1 はっ。おかあさん！

男1 あー！だからやめろっ！そんなんだから内定もらえないんだよ！

女1、男1を睨みつける。男1、口をふさぐ。

女1、去る。

男1 誰に何を言われようが、甘い物をやめることは出来ない。

きちんと歯を磨けばいいだろうと高をくくるが、

昨日磨いたから、と、磨かない今日がよくある。

ママには、知られたくない。

少しづつ親知らずが出てきてモノが挟まるようになって、

俺は特に、危機感を募らせることはなかった

男2、早足で現れて。

男2 おいおいおいおいおい。

男1 なんだよ。

男2 磨けよ。せめて、磨けよ。

男1 は？

男2 そうだ。うるせえなあ。

抜かないならせめて努力をやめないでくれよ。

いいか、あんたには分からないんだよ、恐怖が。

自分を蝕むものと、添い寝しなければいけない恐怖が。

蝕まれるんだぞ。

いいか、なあ、蝕まれて、虫歯になるんだぞ。

男1 わかったよ。

男2 蝕まれて、虫歯に。

男1 わかったわかった。

男2 俺の気持ちも考えてくれよ。俺が蝕まれば、お隣さんも蝕まれる。お隣さんが蝕まればそのまた隣が虫歯になる。そうやって虫歯、虫歯、虫歯――そして最終的には死に至る！

男1 そんな大げさな。

男2 でも、可能性はゼロじゃないだよ。

男1 わかっているよ。

男2 本当に？

男1 わかっている。でも怖いんだ。怖いんだよ。怖がることの、逃げることの何がいけないんだよ！俺の人生だ、ほっといてくれよ！！

男1、走り去る。女1、現れて。

女1 逃げられちゃった。

男2 7番。……いや、俺、一緒にいるから。あいつの口の中に。

女1 そっか。

男2 このままだと、まずいなあ。

女1 そうなの？

男2 ああ、俺は、はえてもう何年か経ってるんだよ。

女1 そうだねえ。結構立つね。

男2 俺、横にはえちゃったからさあ。

女1 足も、こうだしね。

男2 そう……俺、なんでこんな風にはえちゃったんだろうなあ。ごめんな、ごめんな……。

女1 あんたのせいじゃないよ。はえ方は選べないんだから。はえる方も、はえられる方も。

男2 俺がしつかりまっすぐ立っていればなあ。

女1 そんなの、あんたじゃないよ。

男2 俺が、俺じゃなければ、あいつは、あいつはあんなに苦しまずに済んだのに。俺が、俺がさつきから俺が俺がうるさいなあ。

女1 さつきでもないんだって。誰のせいでもないんだって。そんなんで悩んだってしかたないでしょ。歯医者に行けば、抜かなきゃいけない状況になるよ。

女1 あんたの状況を見る人が見たらわかる。だってとっくに――

男2 やめろ！言うな！

女1 なんですよ。抜いて欲しいんですよ。

男2 違う。俺はあいつにちゃんと選択をして欲しいんだよ。

自分の意思で、俺との決別を選んで欲しいんだよ。

女1 そんな悠長なこと言ったられないでしょ。

一刻を争う事態なんだから。

男2 それでも。意味ないんだよ、それじゃあ。

女1 私がいやなの。

男2 七番

女1 私まで蝕まれたくないから。

男2 そっち？

女1、男2、去る。

入れ替わりで男1、駆け込んでくる。悲痛な表情。

男1 気のせいだと思っていた。

これくらいのカケラが口から出てきたときも。

何か固いモノをたべたのだと思っていた。大丈夫。大丈夫。

痛い。左の下の奥歯が、下顎第三大臼歯が、親知らずが、痛い。

痛い。と思うとこのテのものもうダメだ。

耐えられなくなる。極めつけは、これだ。かむ度に、

カケラが口から出て来る。ガリツといういやな音と共に、

……これはもう怪談だ。

音楽が流れる。

男1 奥歯が痛むとき、

上の歯と下の歯のかみ合わせを少しずらして口を閉じる。

こうすると、ゴリゴリという音が、頭のこの辺りでするんです。

そしてゆっくり口を開けると、口の中から、

黒かったり白かったりする小さなカケラが

たくさんたくさん現れるんですね。つぶつぶつぶつぶ

男2、ボロボロになって現れる。

男2 おい……。

男1 ……! どうしたそんな、そんな格好で!

男2 なんでもねえよ。

男1 そんなわけないだろ!

男2 大丈夫。大丈夫だからよ。

男1 やっぱり……そうなの。もう、ダメなんだね、とつくに。

男2 ……そんなこと、ねえよ。

男1 べつ。なあ、これお前なんだろ!

男2 やめろよきたねえな……、そうだよ、ばれちゃしょうがねえ、

とつくの昔に虫歯だったんだよ。

男1 でも……だって……

男2 ああ、無かったろ? お前が苦しまなくて済むようにさ、

一生懸命こらえてたんだよ。

でも身体が疲れているときなんかは痛みが、

どうしてもちまっちゃったはずだ。

男1 でも……私のせいで……。

男2 気にすんな……俺は抜いてもらえればそれでいいのよ。

エナメル質がどうなろうと、しったこっちゃねえんだ。

男1 なんて、なんて言わなかったんだよ……

こんなになるまで黙ってることないだろ

男2、男1を殴る。2人で悶絶する。

男2 いいいてえええ! 俺のいる方殴っちゃまったああ!

お前が自分で決めたことだろ、だったら俺はその決定に従うんだよ。俺は、あんたの歯だからな!

なあ、最後に、俺の願いを聞いてくれねえか。

男1 なんだ。なんか食べたいものでもあるの。

男2 俺を、お前から、抜いてくれ。

男1 ……。

男2 頼む。もう、逃げるな。

男1, 顔を背ける。女1, 現れる。それに気づく二人。

男2 7番。

男1 7番!?

女1 そうよ、私はあなたの、下顎第二大臼歯!

男2 俺のおとなりさんだ。

女1 あんたねえ、いつまでそうしてるつもり？

これ以上こいつを放っておいたら私も虫歯になる。

そしたら、どうなると思う？

男1 どうなるって……

女1 あなたの前に6番が現れる

男2 そっち？

女1 それも放っておいたら、5番、4、3、2、

ってどんどんあなたの前に姿をあらわすことになるでしょう。あなたは自分の歯に

囲まれるのよ。

歯包囲網にせがまれるの。抜けー、抜けーって、毎晩。

男1 やだ、そんなの、やだ

女1 だったら、抜きなさい、そして、磨きなさい。

男2 もういいだろ。逃げるのはもういいだろ。

男1、なんとか頷く。女1、それを見て、歌い出す。

男2 よし。なら、いけ。いくんだよ。まっすぐ前を向いて進んでゆくんだよ。

診察券を握りしめて。

口開けて目を閉じてれば終わるんだ。大丈夫。大丈夫。

痛かったら手を上げる。

もう少しだから我慢してって言われても、後で怒るな。

麻酔の量を増やされても大丈夫だ。

きつと。多分。大丈夫！抜け！親知らず！

男2も歌い出す。

男1 ずっと言いたかったことがある！ちよつと！その歌。その歌ね、

タイトルが「親知らず子知らず」で、一見それっぽいけど、歯のうたじゃないから！

関係ないから！あかっぱじ！

女1、顔を覆って走り去る。

男2 お前

男1 抜くよ。親知らず。

男2 ああ。

男1 母さん、俺、抜くよ、ママあ、おやしらず、ひゅ、ひゅ、ままあ！  
男2 ひゅってなんだよ

2人、握手する

男2 俺はきつと二つに割られる。メリメリメリって音がする。

大丈夫。俺の割れる音で、この辺の骨の割れる音じゃない。

男1 うん、痛みもない。麻酔が効いてる。

男2 こわいか。

男1 こわいよ。

男2 おれもこわいよ。

男たち、抱き合っでなく。

しばらくして、勢いよく離れる。

男2 まつぶたつに割られたらいよいよひっこぬかれる。

ああ、血まみれだ

男1 こんな抜き方しかなかったのかな

男2 今となってはな。もういいよ。

じゃあな。じゃあな。ああ、歯、磨けよ。

男1、手を振る。男2、去る。

男1 ありがとう！ありがとう！俺はやつと勇気を手に入れた。

なんだ。たいしたことないじゃん。でもこう思えるのも、

一度きりだからだ。

今まで、たくさん苦しめた。ごめん。ごめんよ。

でももう抜くこともない。サヨナラ、親知らず。

サヨナラ、第三大臼歯。

おかげでちよっと背が伸びた気がするよ！

そこへ女1、白衣を着て出て来る。

女1 はい、お疲れ様でした。

男1 あ、はい。

女1 あ、ごらんになられます。二つにわれた血まみれの親知らず。

男1 大丈夫です。

女1 そうですか。あの、明日、消毒にいらしてくださいね。

男1 あ、はい。

女1 それから、あの、穴が埋まってからでいいんですけど、だから大体2週間あとぐらい。

男1 なんですか？

女1 もう一本も抜いた方がいいと思うんです。

男1 は？

女1 そうです。あの、今抜いた親知らずの上の、親知らず。

男1 上の、親知らず？え、これも虫歯ですか？

女1 あ、まだ虫歯にはなってないんですけど、

男1 かみ合わせが悪くなるので、あの、よくないんですね。ええ、だから、抜くべきです。  
……え、ええ……。

男2、現れる。

男2 よお。

男1 はっ！

男2 そうだよ。

男1 う、嘘でしょ……。今、抜いたはず……。

男2 わかってるだろ、とぼけんなよ。俺は、お前の、上顎――

二人 第三大臼歯

男2 だ。

男1 はあ……。

男2 そうだよ。

音楽。急速に暗転。

おしまい。